

アミーゴ会だより

2022年1月
通巻第49号
季刊2022-I

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：笠井道彦

新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会
会長 河嶋正之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。会員の皆さまにおかれてはご家族おそろいで健康やかに初春をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。本年が素晴らしい一年であることをお祈りします。

一時は収束するかに見えた新型コロナウイルス感染症はオミクロンO変異株の出現で、新年早々「第6波」の感染拡大が来ています。私たちの日常生活は今年も専ら「自粛：QuédateEnCasa（在宅）」を大原則に、三密回避などの自己防衛の日々を過ごすことになりそうです。昔通り平穏に過ごせる日々が一日も早く到来することを期待します。

メキシコ・日本アミーゴ会の活動は昨年コロナ禍で大きな制約を受け、毎年恒例の総会・懇親会、メキシコ歴史・文化講演会、懇親ゴルフ会などの主催やお台場でのフィエスタ・メヒカーナの協賛などの諸行事のみならず、対面での様々な日墨友好事業を残念ながら取り止めざるを得ませんでした。しかしながら、会員には「アミーゴ会メルマガ」で各種のメキシコ関連オンライン講演事業を折に触れてご案内するとともに、会員のご協力を得て会報『アミーゴ会だより』を年4回刊行して会員間の交流の拠り所とすることができました。会員諸兄姉のいっそう積極的なご投稿を期待します。また、在日メキシコ大使館はオンラインチャンネルで折々の有益なメキシコ情報を継続して届けてくれました。お陰さまで「メキシコの今」を日常の場で体験できました。

メキシコでもウイルス感染が収束せず、O変異株による「第4波」に備えてワクチンの第3回接種や経口治療薬の投与承認などが講じられています。しかし、メキシコ連邦保健省によれば、1月22日には一日の感染者が過去最多の5万1,368人となり、累計感染者は464万6,957人、累計死者は30万3,085人となりました。また、同省は全32州を4色の感染危険警戒信号で色分けし、各色での経済社会活動指針を定めています。2022年1月24日～2月6日の期間、赤色1州（前期0州）、橙色9州（同3州）、黄色10州（同10州）、緑色12州（同19州）と改定されました。なお、赤色はアグアスカリエンテス州で、首都メキシコ市は信号色が緑色から黄色に変更されましたが、市当局は経済社会活動を制限しない方針です。

メキシコ経済は主力の自動車生産・輸出が半導体不足と感染拡大の影響で不調ですが、実質GDP成長率は2021年1～9月には+6.1%と前年の-8.2%から反転回復し、年間でも6%前後の成長が見込まれます。しかし、2022年について政府は+4.1%と予測していますが民間見通しは+3%です。他方、2021年のインフレ率は7.36%と21年ぶりの高水準となり、政府は2022年最低賃金を12%引き上げるとともに、政策金利を12月16日に0.50ポイント引き上げ5.50%としました。政治分野では大統領信任投票が今春予定され、6月には6州の知事選挙が行われます。また、墨米関係では米国の11月中旬選挙のゆくえも気がかりです。

メキシコ・日本アミーゴ会はメキシコ大好き人間の親睦と両国の友好親善を目的とする、ボランティア活動団体です。今後ともメキシコ理解の深化に貢献できる草の根活動を心がけます。幸いにも2022年の干支は「壬寅（みずのえ・とら）」で、壬は春陽を前に草木の根が生長を整える状態を、寅は陽気とともに地中の生命が地表に顕れる様を象徴するとか。あたかも世界平和の新潮流が生まれ、人類の知恵がウイルス禍を克服し静穏な日々が訪れることを期待させます。当会も会の目的に沿った取り組みを展開できる基盤作りを引き続き進めたく存じます。会員の皆さまの更なるお知恵とお力添えを重ねてお願いします。（1月23日記）



= 目次 =

- | | | | |
|--|-------------|----------|------|
| 1. 新年のご挨拶 | アミーゴ会会長 | 河嶋正之 | ...1 |
| 2. 新年祝賀メッセージ | 駐日メキシコ大使 | メルバ・ブリーア | ...2 |
| 3. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ一人旅1-トラスカラ」 | 写真家・アミーゴ会会員 | 阿部修二 | ...3 |
| 4. 私の本棚：『先住民のメキシコ』『国王の道』『銀街道紀行』『メキシコ歴史紀行』（阿部会員著作紹介） | | | ...5 |
| 5. メキシコ報告：「COVID-19州別警戒信号」「経口治療薬承認」「感染者動向」「大統領の高い支持率」／あとがき | | | ...6 |

メキシコ・日本アミーゴ会に寄せる メルバ・プリーア大使新年祝賀メッセージ

MÉXICO

EMBASADA EN JAPÓN



Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría para la Asociación
"Amigo-Kai"

Tokio, Japón, enero de 2022

El comienzo de un nuevo año es una experiencia muy conmovedora sin importar las circunstancias. Es un momento en el que reflexionamos con gratitud sobre el pasado y ponemos nuestras esperanzas e intenciones renovadas para iniciar un nuevo ciclo en muchos aspectos. En ese sentido, un nuevo año nos brinda la oportunidad de revitalizar nuestro entusiasmo por perseguir nuestras metas y sueños.

2022 comienza en un entorno de continuas complicaciones y retos para todo el mundo. Desde nuestros rincones en México y Japón, seguiremos haciendo todo lo que esté en nuestro alcance para mitigar los efectos de la crisis sanitaria global, que nos ha llevado a valorar la salud por encima de otras cuestiones materiales y a buscar nuevas maneras de convivir y permanecer unidos a pesar de la distancia física.

Las difíciles circunstancias que persisten desde 2020 nos han llevado a tener que posponer, adecuar o suspender muchas actividades, incluyendo aquellas realizadas tradicionalmente. Tal ha sido el caso de la Fiesta Mexicana en Odaiba, que, gracias al apoyo entusiasta de los miembros de Amigo-kai, se ha convertido en uno de los festivales más representativos de la cultura mexicana en Japón.

Como Embajadora de México en Japón, quiero reiterar a los miembros de la Asociación Amigo-Kai, mi reconocimiento y aprecio por su continuada relación de amistad y cariño hacia México y por ser un ejemplo constante de la solidez que persiste a través de la relación centenaria de amistad y respeto entre nuestros dos países.

Y, a través de este mensaje, enviarles nuestros mejores deseos de salud, paz y prosperidad para este año, que esperamos esté lleno de oportunidades novedosas para continuar colaborando en el entendimiento mutuo y la amistad entre los pueblos de México y Japón.

Atentamente,

Melba Pría
Embajadora



メルバ・プリーア大使

2022年1月 日本東京にて

新年を迎えることはどのような状況であれ、非常にうれしいものです。新年の始まりは、私たちにとって、過去について感謝をもって振り返り、いろいろな場面で新たなサイクルを始めるにあたり、希望と決意を新たに作る時期でもあります。そういった意味で、新年は私たちの

目標や夢を追い求めるための熱意を刷新する機会をもたらしてくれると言えます。

2022年は全世界にとって、引き続き、困難や挑戦に立ち向かう状況とともに始まります。私たちは、メキシコあるいは日本のあらゆる場所から、世界的な衛生危機による影響を軽減するべく、出来得る最大限の努力を重ねていきます。この衛生的危機により、私たちは物質的な課題よりもまず健康について考えさせられましたし、たとえ物理的に離れていても、私たちが共に生き、気持ちをひとつにしつづけるための方法を模索することになりました。

2020年から続くこの困難な状況により、私たちはさまざまな活動を延期、調整、中止せざるを得なくなりました。中には毎年伝統的に行われてきた行事も含まれます。アミーゴ会の会員の皆様方の熱心なご尽力により、日本で行われるメキシコ文化を代表する最たるフェスティバル「フィエスタ・メヒカーナ in お台場」もそのひとつです。

私は、駐日メキシコ大使として、メキシコに対する友好と親愛の関係を長く温めて来られたアミーゴ会の皆様方に感謝の意と尊敬の念を繰り返しお伝えする所存です。皆様方の存在は、何世紀にもわたる両国の友好と尊敬の関係が存続する確固たる模範となっています。

このメッセージを通じて、新年における皆様方のご健勝、平和、ご多幸をお祈り申し上げますとともに、本年がメキシコ日本両国の人々の相互理解および友好に寄与できるような新たな機会に恵まれた年になりますようお願いしております。

メルバ・プリーア
大使

(メキシコ大使館訊)

ぶらりメキシコ人旅 — トラスカーラ

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
写真家・ルポライター 阿部修二

阿部修二会員に「ぶらりメキシコ人旅」と題して、メキシコのあちこちを訪ね歩いたエッセイを連載していただきます。阿部さんは2005年よりアミーゴ会の会員で、1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒および桑原デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』（2021年9月刊 明石書店）です。〈編集部〉

麗しの古都トラスカーラ

今から500年前、メキシコの歴史にとって大事件となったアステカ帝国崩壊に、大きくかかわることになったトラスカーラ Tlaxcala 市は、西にメキシコの秀峰ポポカテペトル山、イスタクシアトル山、そして南にマリンチェ山を望むことができる丘の、窪地のような所に栄えた古都である。トラスカーラ市は水と緑に恵まれた同名州の州都であり、清楚としたたたずまいが好きで私は何度も訪れている。



ここにはメキシコ市の中央広場ソカロのような石畳の広いスペースはないが、噴水と水盤、四阿(あずまや)のほか、高い常緑の木々と一年を通して目にも鮮やかな花々でうめつくされたソカロが有り、小鳥たちは燦々と降り注ぐメキシコの灼熱の太陽を気にせず、まどろみの時間を楽しむことができる町だ。西の丘には、トラスカーラ族最後の最高指導者、盲目のシコテンカトル Xicohténcatl の像が町を一望していて、その足元から人工の滝が水音もさやけく30メートル下の町まで駆け降りている。さらに町の北縁を幅20メートルほどのサウアパン川が緩やかに流れていて、この地の豊穡を約束している。残念ながらトラスカーラは、これまで日本に紹介されることが少ない町である。が、スペイン人征服者エルナン・コルテスによるメキシコ征服にとっては最も重要な町のひとつである。371の小国を支配していたアステカ帝国の巨大な領地内に、猫の額ほどの狭い土地を支配していたトラスカーラ族は、アステカ軍のたびたびの攻撃にも抵抗を示し、独立を守っていた町だった。



若きシコテンカトルの像

先の征服者コルテスがスペイン国王に宛てた書簡には「この町には大きな市場があり、毎日3,000人以上もの人が集まって来て売り買いするほか、小さな市場は町中にたくさんあります。市場では食料をはじめ衣料、靴など、この地で生産される全ての品物が売られ、金銀、宝石、羽毛の飾り物など、世界の市場で売られているものなら何でも揃っています。さまざまなデザインの土器は美しく機能的で、スペインの物にまったくひけをとりません」と書かれている。ここでは詳しく歴史を語るための紙幅を持たない。拙著『メキシコ歴史紀行—コンキスタ・征服の十字架』（明石書店）を参考にされたい。

今日でも毎週土曜日には、常設市場北側の1ヘクタールもある駐車場が、あっという間にティアングス（露天市場）に模様替えして、足の踏み場もないほどの商品で埋め尽くされる。その光景を目の当たりにすれば、500年前、コルテスのスペイン国王へ宛てた報告書簡が誇大な表現でなかったことが理解できる。太陽が登らないうちから近郊の農家が小さな売り場を確保するために集まってきて、前日のうちに家族全員で収穫しておいた野菜や果物をもちより、所狭しと並べる。それも決して雑然とではなく、まるで芸術品かなにかのような並べ方だ。緑、赤、黄色、橙色、白、紫紺、黄緑の色の洪水とともに、売り買いに熱中する男や女や子供たちの声が、大きな渦となって谷間に響き渡っている。ここトラスカーラには、彼らトラスカーラ族の生活スタイルが今も綿々と息づいているようだ。



整然と並べられた食用サボテン：ノバル



2019年の死者の日にこのトラスカーラに滞在していた。昼食を求めてそのティアングスに出かけてみたが、まさにお祭り状態で、大勢の人が買い物に、さらには食事に集まってきていて、大音量のマリアッチの流れる中で私は食事を楽しんだのだった。

テント下の簡易食堂のセニョールは、目の前で客引き用のどくろの衣装を着けてポーズし、サービスしてくれるという特典つきで、旅の良い思い出になった。

不思議な旧フランシスコ修道院・教会のレイアウト

先述したが、トラスカーラは征服者コルテスと同盟を結んで、アステカ帝国を崩壊させたことで、この町はメキシコのほかの都市とどこことなく異なって、こじんまりしているが、町としての落ち着きを保っている、あるいは成熟した街並みを保存している。これに対してメキシコ市ではアステカ時代の神殿や宮殿などの構造物は徹底的に破壊され、スペイン風の街並みに強制的に作り変えられた経緯があり、かつてのテノチティランの主要建築物が破壊された後、その石材が再利用され、あるいは地中に埋められて封印された歴史を持っていることは周知の事実である。メキシコ市に地下鉄工事が始まる1960年頃までは、かつての面影を探ることがかなわなかった。いっぽうトラスカーラでは、スペイン征服軍と同盟し支援した領主たちの意向を取り入れて、町を徹底的に破壊することをコルテスは躊躇したのだった。

市域の南の小高い丘に、メキシコに最初に建てられたフランシスコ修道会の修道院・教会がある。征服後の1524年に、先住民のキリスト教への改宗のためにスペイン国王によって送り込まれたフランシスコ会のロス・ドーセ(12名の修道士)は、その翌年、重要な宣教拠点としてメキシコ市、テスココ市、トラスカーラ市、そしてウエホツィンゴ町(チョルーラ近郊)を選んで、そこに修道院・教会を設置することを決めている。当時は今日見る石の建物ではなく簡素なものだったと想像する。それでもトラスカーラ以外の修道院・教会のロケーションが、ソカロに面して配置されているのに対して、トラスカーラの修道院・教会はそうしたヨーロッパ風の都市設計に沿ってはいない。

広い窪地にできたトラスカーラ市街地南端に位置する修道院・教会を詣でるには主に北側のシコテンカトル公園からならぬ坂道を上るか、闘牛場脇にある参道を上るのだが、後者はまさにかつての神殿への参道のような趣があり、その参道から見えるのは教会の建物ではなく、半円形ドームの開放型礼拝堂と呼ばれるもので、それはかつての神殿か何かに見紛うほどだ。この礼拝堂はトラスカーラの先住民に、マリアではなく「マドレ・デ・ディオス(神の母)」と呼ばれていたようで、先住民の神々の中にトナンツィン(神々の母)として信仰されていた女神がいたことと関係があったかもしれない。その開放型礼拝堂は当初、太陽を深く信仰していた先住民が暗い教会内に入るのを拒んだために、メキシコに着任した修道士たちが考え出した礼拝堂だといわれている。後に強制的に、あるいは宣教の努力が報われて、先住民が大勢ミサに集まってくると、説教するのに都合がよかったと考えられるが、野外音楽堂のようなこの礼拝堂は、スピーカーなどない時代、前の石畳の広場に集まった大勢の先住民相手に、まともな説教やミサができたのかはいささか疑問である。この開放型礼拝堂があるために、参道からは教会正面が見えない。前述したがメキシコ植民地時代初期の修道院・教会はお決まりのように、地形に不都合や制約がなければ広く平らなソカロ＝中央広場の東側に配置され、信者が祭壇を前にしてエルサレムのある東に首を垂れ、手を合わせるができるように西向きに作られている。さらに加えて先住民が抗しようもない、堅固で巨大な要塞とおぼしき教会が威圧的に立っているのが常である。



旧フランシスコ会教会(右)と修道院



ての神殿か何かに見紛うほどだ。この礼拝堂はトラスカーラの先住民に、マリアではなく「マドレ・デ・ディオス(神の母)」と

呼ばれていたようで、先住民の神々の中にトナンツィン(神々の母)として信仰されていた女神がいたことと関係があったかもしれない。その開放型礼拝堂は当初、太陽を深く信仰していた先住民が暗い教会内に入るのを拒んだために、メキシコに着任した修道士たちが考え出した礼拝堂だといわれている。後に強制的に、あるいは宣教の努力が報われて、先住民が大勢ミサに集まってくると、説教するのに都合がよかったと考えられるが、野外音楽堂のようなこの礼拝堂は、スピーカーなどない時代、前の石畳の広場に集まった大勢の先住民相手に、まともな説教やミサができたのかはいささか疑問である。この開放型礼拝堂があるために、参道からは教会正面が見えない。前述したがメキシコ植民地時代初期の修道院・教会はお決まりのように、地形に不都合や制約がなければ広く平らなソカロ＝中央広場の東側に配置され、信者が祭壇を前にしてエルサレムのある東に首を垂れ、手を合わせるができるように西向きに作られている。さらに加えて先住民が抗しようもない、堅固で巨大な要塞とおぼしき教会が威圧的に立っているのが常である。



ところがトラスカーラの場合、こうした鉄則は守られることなく、教会へ上る石畳みのスロープの途中の半地下に礼拝堂があり、さらには丘の中腹を切り開いたと思われる南北を長辺とする矩形の狭い土地に赤瓦葺きの修道院・教会が建てられている。通常、開放型礼拝堂は教会の北側か南側に接するように配置されているのが常だが、その礼拝堂と教会の身廊の軸がほぼ一直線上にあるのもトラスカーラにみられる特異なレイアウトである。

征服戦争でコルテスと同盟したトラスカーラ族だったが、だからと言って住民がキリスト教を積極的に受け入れたとは考えられない。盲目の最高指導者シコテンカトル・カカマツィンは神話の中で生きていた古い人間だった。コルテスをこのメキシコの地で政権争いに敗れて東方に逃亡した伝説のケツァルコアトル神と盲信して、征服戦争ではスペイン征服者に加担したのだった。いっぽう、彼の同名の息子、トラスカーラ軍の最高軍司令官シコテンカトルは、1519年に同盟を求めてトラスカーラに接近したコルテス軍と激しく渡り合った経験を持ち、スペイン人の容姿や行動、習性、特に戦争における、かたや<生贖金捕虜の獲得>、かたや<殺傷による絶命>という生死感の相違を実体験していた若者だった。1520年6月、スペイン軍が首都を追われ、保護を求めてトラスカーラに逃げ込んだ折に、彼はスペイン人を絶滅する計画を立てていたという。だが、そのことが発覚して父親によって処刑されたようだ。ベルナルド・ディアスは著書『メキシコ征服記』に書き残している。だが、実際にはコルテスが最高指導者である父親のシコテンカトルに処刑を強

いたものと思われる。

話を修道院・教会に戻そう。なだらかな参道の石畳に立って開放型礼拝堂「マドレ・デ・ディオス」を見上げると、かつてここにトラスカーラ族が信仰する神々の神殿があった所だと確信のようなものがわいてくる。トラスカーラ族は姿を変えた自分たちの神々の新しい住まい、強制的に古い神殿を解体させられ、修道士の指導の下にほとんどキリスト教の何たるかも理解せぬまま建てたその礼拝堂に集まって来ていたのだと思う。この地にキリスト教が根付くのは、当時の子供たち、特に修道院に寄宿させられていた領主や貴族



たちの子供たちが成人となつてからのことで、大人たちの改宗に難儀していたことを当時の修道院長だったモトリニアは、トラスカーラで起きた先住民の大人たちとキリスト教を学んだ子供たちとの間で起きていた宗教がらみの事件を、その著書『布教史』の中に書き残している。

2019年11月、トラスカーラ滞在中の土曜日の午後1時、教会の中では若いカップルの結婚のミサが厳かに行われていた。メキシコでもかなり早い時期の1540年に建ち上がった瀟洒な天井装飾を持つ由緒あるこの教会の末席で、



私は新郎新婦に心の中で祝福の言葉を述べ、席をおもむろに立って表に出たのだ。征服から500年、今はすっかりメキシコ人の精神のよりどころとなっているキリスト教の布教の長い歴史を背中に感じて、信仰という不思議な力のことをぼんやり考えていた。



その漫然とした私の目に、大勢の市民が教会の敷地西にあるフェンスにへばりつき、下を覗き込んでいる風景が飛び込んで来たのだ。今しがたまで私は教会の厳かな雰囲気浸っていたはずなのに、いつの間にかその磁力にひきつけられてその仲間に入っていた。前述のように、この修道院（現美術館）・教会の前庭は市街地より約10メートル程高くなつていて、市街地を一望できるようになっているのだが、その直下には、由緒ある教会の聖域にはいささか場違いな闘牛場がある。その闘牛場では、今まさに観衆は息を止め、背中の傷口から血を滴らせて朦朧とする闘牛に、とどめを刺そうとサーベルを構えるマタドールを見守っていた。

ついに息絶えて横たわる闘牛を目の前にしながら、私は植民地時代初期、新しい支配者によって邪教を理由に禁止されたピラミッド神殿での「人身御供」の儀式の図像を思い出していた。（連載その1完）



↑止めの一突き寸前
←教会庭から闘牛場を無料観覧 有料席→

追記：2021年8月13日はコルテス軍と、それに同盟したトラスカーラ軍によってアステカ帝国が征服されてから500周年にあたる日でした。そのことを念頭に、昨年9月に明石書店から『先住民のメキシコ——征服された人々の歴史を訪ねて』を出版させていただきました。植民地時代を生きたメキシコ先住民の葛藤の歴史を、日本の方々を知っていただきたいという思いでいっぱいです。メキシコの歴史に興味をお持ちの方、ぜひ一読を...。（阿部）

私の本棚：阿部修二会員の既刊三部作



『国王の道 メキシコ植民地散歩「魂の征服」街道を行く』（2015年12月刊 未知谷）メキシコ市からサン・フランシスコへ、険しい山を越えて徒歩3000キロ。スペイン人修道士たちの旅を追う。



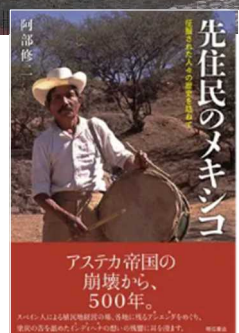
『「銀街道」紀行 メキシコ植民地散歩』（2010年10月刊 未知谷）銀街道の起

点でもあり終点でもあるサカテカス、インディオの大富豪コニンの故郷ヒロテペックとノバラ、チチメカ族討伐基地サン・フェリペ…。様々な人間の喜怒哀楽の物語に溢れた、中世メキシコの銀の交易路「銀街道」を歩く。



『メキシコ歴史紀行 コンキスタ・征服の十字架』（2005年6月刊 明石書店）16世紀、メキシコの先住民民族はスペイン人コルテスによって征服された。写真家の著者が血で血を洗う征服の痕跡をつぶさに歩き、多数の写真とともにメキシコの歴史の暗部を明らかにする。

（以上はTRC MARCの商品解説を要約転載）



メキシコ報告

COVID-19の州別警戒信号(1月24日~2月6日)

メキシコ連邦保健省1月21日公表のメキシコ全32州別のCOVID-19への州別警戒信号は下記の通りです。



(連邦保健省HP: [Presentación de PowerPoint \(www.gob.mx\)](http://www.gob.mx))

- 赤色 (最大警戒) 1州(前期0州) : Aguascalientes
- 橙色 (最高警戒) 9州(同3州) : Baja California, Baja California Sur, Chihuahua, Coahuila, Durango, Nuevo León, Quintana Roo, Sonora y Zacatecas
- 黄色 (中間警戒) 10州(同 10州) : Ciudad de México(CDMX), Estado de México, Guanajuato, Querétaro, Jalisco, Morelos, San Luis Potosí, Sinaloa, Tamaulipas y Yucatán
- 緑色 (通常警戒) 12州(同19州) : Campeche, Chiapas, Colima, Guerrero, Hidalgo, Michoacán, Nayarit, Oaxaca, Puebla, Tabasco, Tlaxcala y Veracruz

日系企業立地数が多い州では例えばアグアスカリエンテス州が黄色から赤色に、バハカリフォルニア州が黄色から橙色に、ヌエボレオン州が緑色から橙色に、メキシコ市やグアナファト州が緑色から黄色に変更されました。

なお、首都メキシコ市(CDMX)は1月21日午前、市独自の警戒信号判断を中止し連邦保健省のO変異株出現に伴う新方式判定に従うとしました。同日午後連邦保健省は上述の通りメキシコ市の信号色を緑色から黄色に引き上げましたが、メキシコ市長は市内における社会・経済活動の閉鎖は行わないが、マスク着用、手洗い励行、衛生的な対人距離確保など通常の保健衛生対処策を引き続き市民に要請すると述べました。

メキシコ報告

経口治療薬の特例承認&ブースター接種の推進

メキシコでも新型コロナウイルスのオミクロンO変異株感染が拡大し、「第4波」の襲来が現実化しつつあります。政府は1月に入り米社製の経口治療薬2種を緊急承認し、重症化しそうな患者に医師の処方投与できるとしました。また、国民にワクチンの早期接種を呼びかけています。

連邦保健省は1月21日現在、全人口の64.5%(8,316万人)および接種対象年齢15歳以上の86.5%が初回接種済みで、うち全人口の59.2%(7,635万人)および15歳以上の79.4%が2回接種済みと公表しました。さらに60歳以上の高齢者に続いて、50歳あるいは40歳以上の年齢層(州毎に異なる)についても、ブースター接種を開始しています。

メキシコ報告

新規感染者の増加続く

メキシコ連邦保健省1月23日公表の新型コロナウイルス感染者は一日当たり新規確認者20,872人、死者98人でした。なお22日発表の感染者は51,368人と過去最多で死者は364人。24日発表では感染者17,938人、死者118人でした。感染者動態は日々変化しています。また、24日時点の累計感染者4,934,517人、回復者3,761,113人、死者303,301人でした。

(原典: 連邦保健省/出所: El Economista紙電子版1月23日付より転載)



メキシコ報告

AMLO 大統領の高い支持率が続く

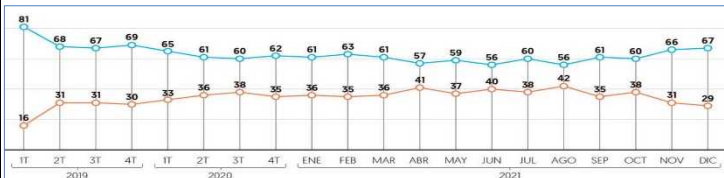
経済紙 El Financiero 紙電子版1月4日付のアンドレス・マヌエル＝ロペス＝オブラドール(AMLO)大統領の月例世論調査で、2021年12月の支持率は67%で同年最高、不支持率は29%で同年最低となりました。年間平均値では支持率61%、不支持率37%(2020年は62%と35%)。2019年は71%と27%でした。

政策課題別の12月評価はワクチン接種が良い76%、悪い17%。経済が良い49%、悪い38%。治安が良い40%、悪い51%。汚職が良い39%、悪い47%でした。

国家の主要課題としては治安維持が47%、経済運営が20%、コロナ対策が12%との表明がありました。

なお、AMLO 大統領の信任投票に際しては63%が信任すると答え、不信任意向は33%でした。

(注:2021年12月中下旬2回実施.全国32州電話調査1,000人)



(出所: [AMLO registra en diciembre su mejor nivel de aprobación del 2021 - El Financiero](http://www.elcomercio.com))

また、経済誌 El Economista 紙が実施している大統領支持率の日次調査(1月25日付電子版)でも、支持率63.5%、不支持率36.2%とAMLO 大統領は依然として高い支持率を維持しています。

(出所: [#AMLOTrackingPoll Aprobación de AMLO, 25 de enero | El Economista](http://www.elcomercio.com))

あとがき：恭賀新年。新型コロナウイルスが地球を覆い緊張の日々が続きます。プリーア大使に新年のメッセージを頂戴しました。今号より阿部修二会員に写真満載のメキシコ奥の細道紀行を連載していただきます。ぜひ「一人旅」の予期せぬ展開にご期待下さい。ところで、メキシコ先住民言語68語のいずれかの言語話者数は750万人＝全人口の5.9%で、独立後200年間で当該話者数は65%も減少(INEGI 2020 センサス)。伝統語 *lenguas indígenas* 地域では初等教育でスペイン語との平行教育も実施されていますが課題山積。編集子は健診指摘で入院治療もヤク y/o トシの故かで集中力断続し編集遅延で課題山積。引き続き会員の皆さまのご投稿を鶴首します。[20220123か]